

180781222 山名 里奈

フランス革命は今から 200 年前に起きたことである。バスチーユ要塞（監獄）がパリの民衆によって攻め落とされ、フランスの本格的火蓋が切られた 1789 年はちょうど寛政元年にあたる。フランス国王がルイ 16 世の時、日本は徳川十一代将軍家斉の時代であり、松平定信による寛政の改革が行われていた。アメリカはまだイギリスから独立したばかりで弱小国家でしかなかった。ナポレオンが政権を掌握した 1799 年のブリュメール（霜月）のクーデターで終わったとするのが一番普通の考え方であり、この十年間がフランス革命の時代とされる。1799 年は寛政 11 年にあたり、革命の十年間はすっぽりと寛政年間に収まるのである。この十年間で革命が最高潮に達するのは 1793 年である。

第 1 章

フランス革命は王政の廃止を目標にして開始されたものではなかった。革命当初は、国民と国王が一致協力して改革を推し進めていけばすばらしい世の中になる、と人々は楽観的に信じていた。革命当初のスローガンは「国民、国王、国法！」であり、このスローガンには、新たに憲法を定めて絶対王政の悪弊を正し、国民と国王が一丸となって国造りに邁進しようという人々の思いがあらわれている。国王が信頼を失い、「王政を廃止せよ」という世論が沸き起こってくるのは、1791 年 6 月の「ヴァレンヌ逃亡事件」以降のことにすぎない。

フランスの君主の家系はメロヴィング家、カロリング家、カペー家、ボナパルト家、の 4 つである。フランス革命の社会システムは、総称して「旧体制（アンシャンレジーム）」と呼ばれるが、その根幹をなすのは絶対王政であった。絶対王政はルイ 14 世の時代に完成の域に達したのである。王権神授説によって国王が絶対的権限を持ち、「生まれ＝血筋」が第一とされる身分社会であった。

革命の混乱をうまく処理できなかつたというので、ルイ 16 世は無能にして鈍重な国王といわれてきたが、明晰な頭脳の持ち主であり、同時代のヨーロッパの君主たちの中でもっとも教養あふれる君主だった。地理、歴史、精密化学に精通し、外国語も数カ国語話せた。平安な時代が続いていたら、啓蒙主義の時代にふさわしい進歩主義的な善政を布いた国王として歴史に名を残すことになっていただろう。また、彼は、妻のマリーアントワネット以外の女性には興味がなく、1 人の愛人も持たない国王であった。革命が彼の時代に起きたのは、彼が改革派の国王であったからだ。もし彼が反動的国王であったなら、徹底的弾圧を行うことも十分に可能だった。しかし、ルイ 16 世は善意の改革派の国王であり、なんとか国をよくし、国民の幸福をはかろうとしていた。

フランス革命の直接的な引き金になったのは、国家財政の破綻だった。事業を営む富裕市民にとっては、多くの土地が教会・修道院と貴族に握られ、国内関税によって商品の自由な流通が妨げられているのは極めて不都合だった。ただ、絶対王政に批判的な人でも、ルイ 16 世のことは嫌っていなかった。ルイ 16 世は、より広く意見を求めるために国民の要請に応

じて三部会を開催した。三部会は1789年5月5日にヴェルサイユで初会合を開いた。この三部会が思うようにいかなかったため、ルイ16世は改修工事を口実にして、第三身分が会議を開いていた部屋を閉鎖した。閉鎖されているのを見た第三身分の議員たちは急遽、室内球戯場に場所を変え、憲法制定まで解散しないと誓った。これを「テニスコートの誓い」と呼ぶ。

1789年7月12日、パリの中心部にあるパレーロワイヤルがにぎわっている中、「財務総監のネッケル罷免させる」とのニュースが伝わってくると、それまで散歩を楽しんでいた人たちは、国王が国会を解散し、軍隊によってパリを制圧するのではないかという恐怖心からパニック状態になった。パレーロワイヤルに集まった人々を前にして、29歳の青年カミーユ・デムーランが熱弁をふるい、王の軍隊に対し、武器を取ってパリ防衛に立ち上がるように訴えた。7月14日、人々は廃兵院に押しかけ銃と大砲を手に入れた。それからさらなる武器弾薬を求めてバスチユに攻め寄せた。攻撃に参加したのは1000人程度であったが、見物人が大勢いたので攻め手の人数が多いと思い、要塞司令官のローネーはみずから降伏した。

第2章

6月20日の深夜、国王一家は国民衛兵隊の裏をかいてチュイルリー宮殿から出た。210キロの行程をたどり、モンメディまであと40キロというところで、国王一家はヴァレンヌの住民たちによって身柄を拘束された。このことをヴァレンヌ逃亡事件という。25日、国王一家は4日間をかけてパリへ帰着した。国王一家を迎える人々は帽子も脱がず、銃も逆さまに抱えたままの冷たい態度であった。

1792年8月10日、パリの民衆は連盟兵隊とともにチュイルリー宮殿に攻め寄せ、守備についていたスイス人傭兵部隊との銃撃戦の末に、宮殿を制圧した。銃撃戦の間、国王一家は国会内に避難していたが、国会は民衆の勝利を見届けたあと、「王権停止」を宣言した。国王一家5人はタンプル塔に幽閉されることになり、囚人同様の境涯になった。

第3章

1789年に自由と平等の理想のもとに開始された革命を「第一革命」と呼ぶとするなら、8月10日を機に「第二革命」に移行したといえる。民衆が革命に参加する、新しい民主主義の時代に入るのである。国王の処刑は、革命が深化する「第二革命」の流れの中で起こった。ルイ16世はギロチンで処刑されることになるが、ギロチンの製作には彼自身も関与していたのだ。ギロチンは人間の首を瞬時にして断ち切り大量の血が噴出するため、日本人にとっては残酷なものである。人道的な処刑方法について国会で議論がかわされていたとき、死刑を廃止しようと最も強く主張したのが、ロベスピエールであった。しかし、圧倒的多数で否定された。ギロチンは鉄の刃を落下させるだけだが、実際にはギロチンの操作は素人に行えるものではなかった。

ルイ 16 世は国民を裏切ったとして裁判にかけられることになった。国王の裁判は、裁判所ではなく国会で行われた。裁判は 12 月 11 日に開始され、議長バレールが告発状の内容にそって尋問を始めた。3 時間にもわたる尋問を終えたあと、議場を退出する前に、ルイ 16 世は弁護人をつけてくれるように求めた。ジャコバン派は否定したが、ジロンド派の主張に従って国民公会は弁護人を認めた。タンプル塔へ戻ったルイ 16 世は裁判が終わるまで家族にはいっさい会えないことを知らされ、悲痛な声をもらした。

12 月 26 日、二度目の国会喚問では弁護人が同席した。ルイ 16 世は「王政の安全」＝「国家の安全」として君主の義務と自分の信ずることを実行してきたので本人は潔白だと確信していた。しかし、革命は一国の国民の運命を私物化しようという考え方であり、正義に反するものであった。つまり、国王であったということこそが罪とされていた。

1 月 15 日、裁判の審理は終わり、「国王は有罪か」「国会の決定は国民の裁可を受けるべきか」「どんな刑を科すべきか」という 3 点が議決にかけられた。まず、全会一致でルイの有罪が決定した。どんな刑を科すべきかについての投票はわずか一票の差で死刑に決まった。ルイ 16 世は断頭台の上から「フランス人よ、あなた方の国王は、今まさにあなた方のために死のうととしている。私の血が、あなた方の幸福を確固としたものにしますように。私は罪なくして死ぬ」と訴えかけた。かつてのルイ 14 世は「朕は国家なり」と豪語したが、これからは「国民こそ国家なり」でなければならなかった。

第 4 章

革命が勃発して 4 年たった 1793 年に、フランス革命は最高潮に達する。ジャコバン革命政府の中枢機関となるのが公安委員会である。公安委員会の最も有力なメンバーとなるのがロベスピエールである。王政廃止宣言は国民公会、全会一致で採択されたが、すぐにジロンド派とジャコバン派の抗争が始まった。

革命の三大指導者のひとりであるダントンは、革命は内部の同士討ちは避けたいと思い、何度もジロンド派に妥協の手を差し伸べてきた。それをロラン夫人は手厳しくはねつけた。1793 年 4 月、ジロンド派はジャコバン派の三大指導者のマラーに照準を合わせ、革命裁判所に送ることに成功したが、結局マラーの人気を高めただけだった。

革命の要である国民公会内で革命指導者たちがいつまでも内輪もめを続けていた。この状況を打開するためにパリの民衆が立ち上がったのである。1793 年 6 月 2 日、民衆が国会を包囲する中でジロンド派の主だったメンバーの国会追放が決議された。革命の主導権はジャコバン派になる。

第 5 章

1793 年 9 月 5 日の民衆蜂起によってジャコバン革命政府の形成が加速化されたのであったが、恐怖政治の態勢が本格的に整えられ始めるのも、この蜂起をきっかけにしてであった。恐怖政治の最初の犠牲となったのはマリーアントワネットであった。ヨーロッパ連合軍と

の戦いが熾烈化する中で、「王妃を裁判にかけろべきだ」という世論が高まっていった。マリーアントワネットは少女の頃から、ハプスブルク家の皇女にふさわしい気品と威厳が備わった、美点にも恵まれた女性であった。興入れ先がフランス以外の国であったなら、栄耀栄華のうちに生涯を閉じたであろう。ルイ 16 世は愛人をつくらない変わった人物であったため、マリーアントワネットは自分のほうが好きな男性をつくってしまうのである。その男性はスウェーデンの上流貴族に生まれた、アクセル・フェルセンという。ヴァレンヌ逃亡事件に関しては彼の協力もあった。

マリーアントワネットは、優柔不断な夫のルイ 16 世に代わり、敢然として革命に立ち向かおうとするが、ものごとを深く考えることが苦手な彼女には政治は不向きであった。

1793 年 8 月 1 日に、マリーアントワネットはタンブル塔からコンシエルジュリに身柄を移され、ここが彼女の終の住処となった。

テルミドールのクーデターで恐怖政治は終わるのであったが、恐怖政治で罪のない人がたくさん犠牲になった。ロベスピエールの死によって革命らしい革命の時代は終わるのである。

第 6 章

ナポレオンは貴族で士官学校も出ているため、将校にはすぐになれた。しかし、下級貴族の出身なので、革命がなければ將軍にはなれなかっただろう。「生まれ」ではなく「個人の實力と才能」が重視される社会に切り替わって、ナポレオンにチャンスが与えられた。

ブリュメールのクーデターが失敗しそうな雰囲気になってきたとき、ナポレオンは兵士たちを前にして演説したが、兵士たちは国会護衛の任を与えられていて、ナポレオン直属の部下ではなかったから、指示通りに動こうとはしなかった。議長リュシアンが熱弁と名演技によって兵士たちを動かし、議員たちを議場から追い出したあと、予定通りに合法性の装いを保つために、城の敷地内にとどまっていた議員たちをふたたび議場に招き入れた。総裁政府廃止と臨時執政政府設立の決議がなされ、ナポレオン、シエイエス、デュコの 3 人が臨時執政に選出された。

このクーデターをもって革命は終わったとするのがいちばん普通の考え方であるが、ナポレオン戴冠式をもってフランス革命は最終的に終わったのである。つまり、ナポレオンの皇帝戴冠は、フランス革命の完成であった。